

寄稿



福岡県知事
服部 誠太郎

新型コロナウイルス感染症 への対応について

公益社団法人福岡県医師会の皆さまには、日頃から、本県の保健医療介護行政に深いご理解と多大なるお力添えを賜わるとともに、県民の健康保持増進を目的とした地域医療活動に取り組んでいただいております。

蓮澤会長をはじめ、役員ならびに会員の皆さまの熱意とご努力に心から敬意を表し、深く感謝申し上げます。

令和2年1月に国内初となる感染者が確認された新型コロナウイルス感染症は、本県においても、同年2月に初めて感染者が確認され、その後、ウイルスの変異とともに流行を繰り返し、県民生活や社会経済活動に大きな影響を及ぼしました。

新型コロナウイルス感染症への対応においては、県民の皆さまの大切な命と健康を守り抜くことを第一に、本県では「福岡方式」とも呼ぶべき取り組みにより、医療提供体制の維持・強化を図ってまいりました。

入院病床については、貴会や医療機関をはじめ、多くの医療関係者の皆さまのご理解とご協力を得ながら、最大2,089床確保しました。また、陽性が判明した段階から直ちに行う血中酸素飽和度を用いたトリアージや、病床の利用状況をリアルタイムで共有できる独自のシステムの活用により、病床の効率的運用や効果的な入院調整を実施しました。さらに、貴会のご協力のもと、全ての宿泊療養施設に医師・看護師が24時間体制で常駐するとともに、全国に先駆け、中和抗体薬の投与体制を整備して重症化を防ぐなど、医療的対応が可能な環境を整備しました。

貴会とは、私自身が松田前会長と幾度にもわたり直接意見交換を行い、共同で記者会見を開いて県民の皆さまへの呼びかけを行うなど、まさにワンチームで取り組んでまいりました。

貴会をはじめ、医療の最前線でご奮闘いただいた医療従事者

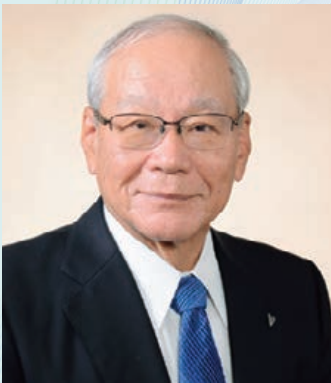
など多くの関係者の皆さまのご尽力のおかげで、3年あまりにわたる新型コロナウイルス感染症との闘いにおいて、医療のひっ迫を防ぎ、度重なる感染拡大の波を乗り越えることができました。長きにわたりご尽力いただいた全ての皆さまに、心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症への対応を踏まえて改正された感染症法では、新興感染症の発生及びまん延に平時から備えるため、入院や発熱外来、後方支援などの医療提供体制の整備等を目的とした都道府県と医療機関などの協定締結の仕組みが設けられました。

県では、重症度に応じた入院の受け入れや、外来対応などの役割分担が図られるよう、医療機関などと協定締結を進め、新興感染症の発生時に速やかに対応できる医療提供体制の構築に取り組んでいるところです。

新型コロナウイルス感染症をはじめとする新興感染症の多くは人獣共通感染症とされており、生態系の変化や気候変動などにより、もともと野生動物が持っていた病原体が人に感染するようになったとされています。このような人獣共通感染症に対応するため、本県では、「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」を一つと捉え、一体的に守っていくワンヘルスの取り組みを、貴会をはじめとする関係機関や団体の皆さまとともに進めています。引き続き、皆さまのご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

結びに、貴会の今後ますますのご発展と、会員の皆さまのご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げます。



日本医師会名誉会長
横倉 義武

感謝

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的な流行は、福岡県においても県民の生活に深刻な影響を及ぼしました。新型コロナウイルス感染症の第1波が押し寄せた際、私は日本医師会長として、全国の医師会と連携しながら、感染拡大防止と医療提供体制の確保に取り組んでいました。その中で、福岡県医師会の皆様が迅速かつ献身的に対応される姿をお聞きし、大変心強く感じたことを今でも鮮明に覚えています。

この百年来の危機に際し、福岡県医師会は、故松田峻一良会長の卓越したリーダーシップのもと、医師会の役員、各郡市医師会の努力と会員の皆様の尽力で県民の命と健康を守るために多岐にわたる取り組みを展開されました。

県民の命と健康を守るという強い使命感のもと、PCR検査体制の整備やワクチン接種の推進、医療機関への支援活動など、多岐にわたる取り組みを展開されました。また、不確かな情報が飛び交う中で、正確で信頼できる情報を県民に発信し、不安を抱える多くの人々を支える役割を果たされました。その積極的な姿勢は、地域医療の現場に立つすべての関係者に大きな希望を与えたと思います。医療従事者、行政、地域住民が協力し、感染拡大を防ぐための取り組みを推進する姿は、まさに地域医療の模範といえるものでした。

感染拡大初期の2020年春、松田会長は県庁・県議会を訪問し、感染防護資材・医療機器の整備や医療提供体制の強化、職員数の確保など、緊急の要請を行いました。この迅速な対応は、医師会と行政の協働で県内の医療体制を整備し、感染拡大を抑制する上で重要な役割を果たしました。

また、病床不足が深刻化する中、福岡県医師会は隔離が必要な感染者を安全に受け入れるため、ホテル療養という新たな療養形態を県行政に提案し、JMATとして医師や看護師をホテルに常駐させることで、医療の質を確保し、感染者へのきめ細や

かなケアを提供し、県民の安心を維持しました。この取り組みは、感染拡大期における医療体制の崩壊を防ぐ上で非常に重要な役割を果たし、地域医療の持続可能性を守るための模範的な対応であったといえます。

私は感染症の初期段階において日本医師会長として全国の医師会と連携し、感染症対策の指揮を執っていましたが、2020年8月以降は福岡県に戻り、地元での活動を通じて県民の意識向上に努めました。テレビや各種メディアを活用し、感染症への正しい理解と予防行動の重要性を発信することで、地域社会全体での協力体制の構築に力を尽くしました。こうした活動が可能だったのも、福岡県医師会の確かなリーダーシップがあったからこそと感じています。

さらに、福岡県は「ワンヘルス (One Health)」の理念を活動の根底に据えています。人間、動物、環境の健康が密接に関わり合っているというこの考え方は、感染症対策においても極めて重要です。福岡県医師会は、この理念を実践に移し、医療だけでなく社会全体で協力する体制を築くために尽力されています。福岡県はワンヘルス活動の発信地として日本のみならず、国際的にも評価されていますが、このたびのコロナパンデミックを振り返ると地域社会に深く根付いた医療活動が、感染症の危機においても地域の安定を支えたことは、ワンヘルスの理念がいかに現実的で重要であることを証明しています。

福岡県医師会のこうした活動は、単なる医療提供に留まらず、地域住民の信頼と安心を築き上げるものでした。その中核にあったのは、「県民のための医療」という強い使命感と、医療従事者全員の献身的な努力です。これらの取り組みを記録としてまとめる本書は、医療従事者の功績を後世に伝えるだけでなく、今後の感染症対策や地域医療の発展に向けた貴重な指針となることでしょう。

最後に、コロナパンデミックと闘い無念の戦死をした松田峻一良先生のご冥福を祈り、福岡県医師会の全ての会員、医療従事者の皆様に心より感謝申し上げます。この記録集が、福岡県医師会の取り組みの軌跡を未来へとつなぎ、地域医療と社会全体の発展に寄与することを願っております。



福岡県医師会参与
(前 福岡県新型コロナウイルス
感染症調整本部長)

上野 道雄

コロナウイルス感染症

2020年はコロナと共に始まった。武漢の得体の知れない肺炎はコロナウイルス感染症として世界中に拡散した。第二種感染症指定医療機関は、戦後70余年、何の経験もない。エボラ出血熱流行時の思いが蘇った。福岡東医療センターの院長時代、病棟の看護師に概要の計画を伝え、会場は感染症への恐怖と疎外感からすすり泣きで満たされた。感染症センターの引き受けの条件は、いざという時の全県的支援体制であったが、連絡に音沙汰もなく、日々、職員に不安と焦燥が満ち満ちていた。腹を括って、エボラ出血熱関係機関協議会を4日後、本院が開催することを、福岡県を始め県内の4大学、検疫所、第二種感染症病床設置病院、福岡県・粕屋医師会、古賀市、粕屋消防署と警察署に伝えた。驚くことに、全ての関係者が揃い、病院の現状と合同シミュレーション計画、当院への支援計画と着脱訓練の実施を提案した。小生の気合に押されて、全て賛同された。具体的な支援計画の協議、他病院の医師や看護師が着脱訓練に参加する姿勢は職員の不安を徐々に解消させ、実際の疑似エボラ患者の入院粛々と対処した。

第二種感染症指定医療機関の院長は個々に不安で一杯である。病院長同士が顔を合わせ、不安を共有し、対策を考える会議の開催を福岡県に強く働きかけた。保健医療介護部長の理解、高校同級の小川前知事の支援もあり、感染症関係病院長会議を3月1日に開催した。全ての病院長は病床の現状、医師、看護師数等の不安、着脱訓練や患者の動線等の不安を熱く語った。連携の輪が広がり、指定医療機関の病床だけでは危ういこと、連携して個々の感染症体制を強化することを共有して終了した。

保健医療介護部長と感染症病床の確保に奔走した。県内の病院長は病床確保に積極的に協力頂いたが、とても患者数の増加に追い付かない。病室の問題もあるが、専門医が枯渇しかねない。コロナ患者への対応は健康観察と隔離の軽症患者と呼吸管

理が必要な重症患者に大別される。重症患者を専門医が病院で担い、軽症と無症候性患者をホテルで非専門医が酸素飽和度を指標に観察する。医療崩壊を遠ざける、苦肉の策であった。

2021年1月、コロナ流行は3度目のピークを迎え、ホテルの宿泊病床で呼吸不全の患者が出現し、病院への転送に難渋し、医療崩壊が憂慮された。高齢者施設は、外出しない高齢者がコロナに罹患すると、施設は責任を感じて、急性期病院に搬送する傾向が強かった。高齢者は、個室に隔離され、予防着を完全装着した看護師に面食らい、会話の機会も減り、恐怖心を抱いた。認知傾向が急速に進み、認知症患者が急性期病院に滞った。一方、馴染み深い高齢者施設で対応すると知的状態の悪化はない。酸素飽和度で経過をみて、状況に応じた病院搬送で何の問題もなかった。この事実を高齢者施設と御家族に伝えることが急務であった。驚くことに、県内に3,000の高齢者施設、小さな所を入れると13,000施設に早急に伝えることは難しい。そこで、保健所から施設に連絡し、更に横の連絡を行い、Zoom会議を4地域で2回ずつ実施した。急な連絡にも関わらず、1,000施設ほどが参加した。

重症度を勘案すると、最悪の第4波が、急襲した。ホテル病床から急性期病院への搬送基準を酸素飽和度93%から90%に変更したにも関わらず、搬送患者が5倍に増え、酸素を投与しながら搬送を待つホテル病床の患者が増えた。自宅待機患者も急増して、どうにか終息した。

ホテル入室者では、酸素飽和度70%台が複数名、80%台が相当数見受けられ、安全限界を超えていたが、幸い、死亡患者はなかった。高齢患者の病院搬送とホテル入室は抑制され、ホテル入室者は病床利用者の倍を超えた。福岡県の医療は危うく崩壊を免れた。医師が常駐する準医療施設、ホテル病床と高齢者施設の協力が大きかった。皆様の協力でどうにか破綻を免れました。本当に有難うございました。